

NIBF

公益財団法人 日本舞踊振興財団

Information

No. 45

2014 New Year

目次

- ◆名手訪問／対談 小倉 和夫(国際交流基金 顧問)
- ◆講演会／「民話と古典芸能」 山口 崇
- ◆日本舞踊誌上講座／日本舞踊の歴史を振り返る②
東京大学文学部 教授 古井戸 秀夫
- ◆青少年に対する日本舞踊の普及活動
- ◆特別会員芳名
- ◆NBF活動報告・行事予定・編集後記

名手訪問

《対談》

●小倉 和夫 (国際交流基金 顧問)

●西川 扇藏 (公益財団法人 日本舞踊振興財団 理事長)
[敬称略]



2013年10月1日(於:国際交流基金 応接室)

西川 今日(2020年)のオリンピックが東京に決まったと言う事で、招致委員会の評議委員会事務総長という立場でいろいろとご苦労もありだったと思うのですが、活動についてお話していただける範囲でご苦労の程であるとか、諸々をお聞かせいただければと思います。

小倉 最初は、都民の方国民の方の支持が非常に低かったものですから。ですからそこを何とか皆さんが支持して下さるような形に持っていこうとしました。支持が高くないと盛り上がりませんし、活動している人の意気も上がりません。国際的にもそんなに支持が低いようでオリンピックがやれるのか、というような話もありましたものですから、やはり皆さんの支持、ご支援、そういうものを盛り上げる。そこが一番苦心した所でございます。ですから

外に対する働きかけも大変重要ですが、それはあくまで一番最後の段階のことです。そこまでに皆様方のご支持をどうやって頂くかが問題でした。特に震災がございましたので、復興の問題もございます。復興があって、その過程でオリンピック招致活動をした事はかえって良かったのではないかと考えております。と言いますのも、もちろん一部の方は今でも復興しなければならぬ事があるのに何でオリンピックにお金を使うのかと、もっと復興でやるべきことがあるのではないかと。復興の時に示された東北の方々はもちろん、日本全体のがんばろう精神、一所懸命にやろうじゃないかという気持ちがオリンピックにも通じるのではないかと思います。考えてみますと1941年のオリンピック、これは結局東京には戦争で来ませんでした、東京でやることになっていまし

た。その時も関東大震災の後に、復興の一つの高い目標として、東京でオリンピックができればということを考えておりましたし、1964年の東京オリンピックはもともとは1950年代の初め頃から、招致活動しておりました。これは第二次大戦からの復興ということがございましたので、力強く復興していこう、そのためには遠くに一つの目標のようなものがあつた方がいいのだらうという考え方がございまして、その点だんだんご理解が進んでいったと思います。

西川 ご苦勞が実り、決まってよかったですよね。

小倉 おかげさまで、たださっき申し上げました支持率の他にも、やはり放射能の問題とか、いろいろと相手からつかれる問題がございましたので、これをどうやってうまく説明するかということがございました。そこが少し苦勞したところです。東京都知事、総理はじめ政府の要人の方が日本の問題だということをおっしゃられて、世界に心配をかけないようにということで、いろいろご説明されましたので、これは返ってよかつたと思います。弁解ばかりしておりますと、あるいは逃げ回っておりますと、返って猜疑心が生まれてくる。出来た事は出来た事、問題のある事は問題のある事で、それを解決する努力を率直に世界に訴えたのが逆によかつたじゃないかと思つます。

西川 最後の最後に東京になつた決め手というのは何だつたのでしょうか。

小倉 そうですね、私は日本全体のチームワークが良く取れていたというのが、最大のことだと思つます。反対運動もありましたし、東京の失言もあり、失敗も若干ありましたが、最期はやはり経済界、政界、スポーツ界はもちろん、

色々な方々の気持ちが一致して全体のチームワークがとれ、色々な方が色々な所で動いて工作された。もちろんスペインも皇太子が出馬されたり、トルコも首相自ら一番活躍されたりしましたが、国の中のまとまりということからみますと、トルコにはデモもありましたし、スペインは経済困難がありました。やはり陣営に若干乱れがありました。日本はその点チームワークが最終的には良く取れ、それが色々な意味で力になつたと思つます。野球もそうですが、一人のホームランバッターがいてもチームワークがとれません、勝負に勝てないのと同じです。そこが決め手であつたと思つます。

西川 日本は海に囲まれて他の国と離れているから、いろいろなことが左右されない。そういう点でもいいですね。



小倉 そうです。日中、日韓関係が多少緊張しておりましたが、概して日本は安定していた。それとオリンピックが今、曲がり角に差し掛かっている事も関係しているようです。いままでは1964年の日本もある意味ではそうだったかもしれないませんが、1988年のソウルオリンピックとか、2000年代になつての北京オリンピック、それから今度ブラジルでありますけれども。最近オリンピックは新興国が、国が龍のように昇っていくようなときにオリンピックがあり、世界もその国を「がんばれ」ということで、その国もがんばる一つのシンボルにオリンピックをしようというムードがありましたが、新興国ばかりでは色々な問題も起こりやすいです。安心安全なところでやりたいというムードもございまして、ロンドンで開催したらうまくいった。今度はブラジルで

すから、その次は先進国の安全安心な場所でやりたいというムードも、オリンピック関係者の中にあっただけです。それが一つのムードを作ったということもありますし、ロンドンで開催し、今度はアメリカ大陸です、その次はアジアというのは自然な流れじゃないかというムードを作ることができた。そういう意味では地理的に次はアジアが自然じゃないかと日本が言いやすかった。そういう点もあったと思います。

西川 われわれ国民の知る範囲では、最初はトルコが優勢で、日本が一番支持がなかった。それがだんだん日本が優勢になってきたら、失言問題とか原発の問題とか、今度は最期マドリッドが優勢というようなメディアの取り上げられ方だったですけれども、蓋を開けてみたら全く違って、ある意味東京の圧勝的な感じでした。そういう予想と言うのはある程度なさっていたものですか。

小倉



最初、強敵は圧倒的にトルコでした。というのは、スペインは2年位前にEUの通貨問題、経済問題が深刻でございまして、いろいろな問題がありました。そういう所ではオリンピックはできないじゃないかという非常に強いムードがありました。トルコは今回、4回目か5回目の立候補になりますので一番張り切っておりました。特にあの地域では初めてだということを書いてましたので、トルコは強敵だというムードが非常に強かったです。東京は最初、非常に支持率が低かったのですが、トルコでデモが起り、一部シリア問題もあり、中東情勢に非常に問題が出てきたことから、安全安

心の東京が注目されてきた、その後マドリッドが巻き返してきました。これは前のIOCの会長、サマランチさんの影響、あるいはスペインはIOCの委員が3人いたのですがその3人が駆けずり回って、王室が乗り込んで華やかに活動をしたものですから、大分マドリッドの注目が上がりました。一時は東京とマドリッドの決戦かという噂もあったようです。かなり東京が一步前に出ているというのは大変多くの人の共有でございましたけれども、そう言いますと、皆さん気が緩みますので、最期の段階でも東京を楽観視することは誰もしていませんでした。これからの問題はどのようなオリンピックを開催するかということだと思います。これが一番大きな問題です。ちょうどいい機会ですので申し上げたいと思うのですが、実はこれはあまり世間で注目されてないのですが、オリンピック憲章というものがあって、その第39節にこういう文句があります。オリンピックを組織する組織委員会は、少なくともオリンピック村(選手村)が開設されている時期、ほぼ3週間間に複数の文化イベントを開催しなければいけない。と書いてあります。この文化イベントは事前に計画を立てて、国際オリンピック理事会に提出してその承認を得なければいけない。これは非常に深い意味がありまして、オリンピックはある段階では、スポーツと同時に文化の祭典だったということです。実は文化に対して金メダルを与えていた時期もありました。しかし後に文化に金メダル銀メダルというのは変ではないかということで無くなりました。ですからオリンピックがやっている期間には一大文化イベントを幾つかやらなければいけないということになっている訳です。それは国によりまして、それを非常に重視する国と、おざなりと扱っては申し分けないですけど、一応形だけという国もあります。やはり

せつかく日本でやるのであれば是非この期間に文化イベントを企画して日本の文化を世界に発信できればと思いますので、日本舞踊もぜひその一環としまして、何かいい企画があれば是非にと思っています。

西川 オリンピックの競技種目について何かご意見はございますでしょうか。

小倉 オリンピックでは日本人が好むスポーツ、野球、サッカー、ゴルフというのは入っておりません。一応形の上では野球が入ったり、サッカーも年齢制限の中では入ったりはしていますが、伝統的にはオリンピックにはそういう競技は入っておりません。相撲もありません。日本人が普段見るようなスポーツはオリンピックではあまり出てこない。むしろ十種競技ですとか、普通多くの方はあまりご覧にならない競技がオリンピックには出てきますので、オリンピックの競技種目のあり方をこれから考えなければいけない、という点はあると思います。レスリングはこの間オリンピック競技から外されそうになって大騒ぎになりました。どういう競技がいいのか、いろいろと苦労がするところです。

西川 それまでのアマチュア主義から、ビジネス的にも少し広げていかななくてはいけない、ということでバスケットを入れたりしています。やはり今でも一応方向性としてはそういう方向性なのでしょうか。

小倉 そうですね、スポーツ界全体で経済的なプロスポーツが盛んになっておりますから、プロを除外してアマチュアだけという訳にはいかないと思います。そういうアマチュアリズムというのは実は昔はあったのですが今はないです。それは事実だと思います。ただ、そうは言っても、多くのスポーツは、野球とかゴルフと違い、陸上や水泳

それだけで飯を食うという訳にはなかなかいきません。そういう意味でアマチュアリズムというのは未だ存在しております。問題は企業のスポンサーとか、そういうことをどう考えるかという所がございます。これは非常に難しい問題で、日本でも歌舞伎はある程度松竹がおられて、商業的にかなり成り立つ部分がございますけれども、能、文楽などは必ずしも成り立たない部分もございます。

西川 先程、オリンピック、イコールスポーツではなく、文化の発信、交流ということをおっしゃってました。7年後のオリンピックはわれわれ日本舞踊の仲間も、良いチャンスだと言っています。オリンピックは2~3週間ですが、招致に成功したことによって、モチベーションも上がりますし、そこに向けて何か一つのきっかけになればと感じ、大きな意味での日本舞踊、さらに言えば古典芸能の、日本舞踊、能、狂言、歌舞伎、文楽も含めて、何か大きなことができればと思っています。とかくそういう時に日本舞踊は、置いてきぼりになってしまう傾向があるので、そこに何とかわれわれとしても、入るような形にしていかなければいけないと思います。

小倉 これは非常に難しい問題でいろいろ苦心されている所だと思いますが、日本舞踊とは一体何かという、歌舞伎や能は一応こういうものだろうと言えます。ただ日本舞踊は何かと言われたときに、普通の人にとりましてこれがなかなか説明が難しい。一つここをうまく乗り越えて世界に発信して頂きたいと思っています。私達も実は料理の問題がございまして、日本料理という言葉を使いますが日本料理とは何かというんです。お寿司もあれば天麩羅もある、会席料理やおでんもありなかなか説明しづらい。実はフランス料理は

ユネスコの文化遺産に登録されています。驚くべき事にフランス料理と書いてあるのですが、料理の作り方や食材は書いていません。形式が書かれているのです、まず前菜があって次にスープがきてお肉がくる。必ず順番がありワインが出て、驚く事に会話があるとか、そういう形の事が書いてあります。形ということを考えますと、私は日本舞踊の形というものを世界にきちんと伝えてお示しいただきたいと感じています。

西川 招致委員会評議委員会事務総長という立場は今ほどのように。

小倉 9月30日で一応、招致委員会というのは解散しました。もちろん多少は残務整理がありますので、若干のスタッフは残っておりますけど、招致委員会そのものの活動というのは、これで終わりにしようということです。今度は組織委員会というのが実際にできます。これは招致とは違っていて、競技場をどうするかとか、直接建設的な話が出てきますから、いろんな人が管理してくれると思います。今、東京都が中心になって、5ヶ月以内に作るということになっています。9月7日に決まりましたので、2月頃までに組織委員会を作ることになると思います。私は

オリンピックの場合は、どういう競技場を作るかとか、ドーム作るかということももちろん必要ですけれども、そういう精神と申しますか、どういふことをこの機会に実現したいのか、そこを皆さんに考えていただく事が大事だと思っております。

西川 今日はいろいろとありがとうございますました。

小倉 オリンピックの原点というのは人間の身体と心の健全な発展ということだと思います。しかしスポーツというのとはかくそれだけでは人格形成に十分ではない。やはり芸術等が加わって、はじめて感性の問題があるのではないかと思います。そういうことがオリンピックのある段階では非常に言われていた事があります。ただ第二次大戦後、特にアメリカが非常に力を持って、商業性や経済性が重視されるようになりましてから、オリンピックと芸術・文化の関係というのが、だんだん曖昧になってきたというのが事実だと思います。日本が7年後にもう一度そこを芸術・文化とスポーツの関係を復権させて、やはり文化の力とスポーツの力というのがあいまって、社会に一つの活力というものが生まれてくる事が非常に大事だと思います。

小倉和夫氏 プロフィール



1938年 東京都出身
1962年 東京大学法学部卒
1964年 ケンブリッジ大学経済学部卒
1962年 外務省入省
香港総領事館総領事、アメリカ局北米第二課長、アジア局北東アジア局課長、大臣官房審議官(経済局担当)、大臣官房文化交流部長、経済局長、駐ベトナム大使、外務審議官(経済担当)、駐韓国大使、駐フランス大使を歴任
2003年 国際交流基金理事長に就任(～2011年)(現 国際交流基金顧問)
2011年 東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会評議会事務総長に就任(～2013年)
著書
『グローバリズムへの叛逆—反米主義と市民運動』、『吉田茂の自問—敗戦、そして報告書『日本外交の過誤』、『中国の威信日本の矜持』他多数

第47回 講演会

「民話と古典芸能」



講師 山口 崇氏

日時 平成25年8月2日(金)
15時00分～16時30分会場 東京信用金庫本店
8階ホール

山口崇です。こんにちは。

先ほど舞踊の講習会をやっておりました。ちょっとのぞかせていただきましたけど、皆さん熱心に講習を受けておられました。この夏の暑い時に素晴らしいひとつの活動をやっておられるということで、あらためて敬意を表しました。今日の演題が、「民話と古典芸能」ということになっております。お話を頂戴した時に私たち生活の中にある日常的芸能と、舞踊家としての伝承芸能、古典芸能をどのように結びつけていったら、私たちの生活が楽しく豊になるだろうか、こういうところでお話してみようかと思ったら、「民話と古典芸能」ということになりました。実は私明日、日本橋公会堂、俗称日本橋劇場で、私が属しております、お三味線長唄の杵巳流一門会の演奏会があります。それで私は何を弾くかという、僕は勸進帳を弾きます。全曲ではなく「呼びとめ」と「山伏問答」を演奏します。それでも24～25分になります。皆さん興味があったら聞きにきて下さい。

さて、「民話と古典芸能」。民話のあたりから自分自身の脳を洗いなおしてみようと思いました。今は便利な世の中です。私みたいに年をとってもパソコンを使えますから、パソコンの中にこれまで数十年に亘って書いてきた、山口民話の原稿がぎっしりつまっているんです。ボタン一つでプリントアウトしてくれます。ここでちょっと民話とはどんなものか読んでみ

ましよう。本来は「語る」のですけれども。「山口崇の民話紀行、瀬戸内淡路の昔」というような副題をつけて、とある雑誌に書いた原稿の中に「おりゅう柳」と言う題名の民話があります。淡路の民話の一つの例ですが、これを語ってくださったのが、当時60代、農家の主婦の方でした。江戸時代から400年以上の歴史を持っている淡路人形浄瑠璃座の演目の中にも、この「おりゅう柳」民話の「おりゅう柳」の筋立てに似た演目がございます。これは「三十三間堂棟木の由来」というのが、半正式な名前ですけれども、これを知っている人はかなり浄瑠璃好きの人、義太夫好きの人だと言えるかも知れません。

明日私が弾く「勸進帳」は聞いている人ほとんどが、唄の内容はわからないと思います。難しい言葉ですからわからないと思いますけど、これはもう感覚で聞いていただくしかないと、私は思っております。ついこの間、本当に私は死ぬほど悲しかったのですが、ある歌舞伎役者が若くして一人亡くなりました。勘三郎さんですね。勘三郎さんとは何度かお仕事を一緒にさせていただきましたけれども、皆がおもしろく感じてくれる芸と芸能というのはいったいなんだろう、というのを一生考え続けられた方ですね。この勘三郎さんが私にこんな事を言った事があります。「僕は舞台の上で踊っていても、芝居をしていても、何か芸事をやっているとき、その時に客席で解説書を

読まれるのが僕は一番嫌いだ。わからなくてもいいじゃないか。その感覚の中で感じ取ってくれたものが、良いか、悪いか、ということとそれが俺達の評価に繋がるんだ。山口さんあれイヤだね。解説書を読みながら観られるのが俺一番たまらないんだよ。」って言うておりましたけれども、芸をとことん追及なさった、あの方の一つの感懐だったんでしょうね。思いだったのでしょ。それと同じように真似するわけじゃありませんけども、例えていうならば、明日の「山伏問答」もこれは富樫と弁慶の二人の問答ですけれども、わからなくても日本語のリズムの美しさ、音の響きの美しさを客席で感じ取ってくださればいいな、と僕は思います。

私は30年くらい仕事のない時には録音機を担いで全国をうろつきました。山形県に近い宮城県の上野で聞いた話があるのですが、それを聞いた時、思い出したのが「安達ヶ原」です。明治になってから、この「安達ヶ原」を民話の語りを織り交ぜながら、本来の謡曲の歌詞を使って長唄に作曲しなおし、一気に世の中の流行歌になって広まりました。お芝居の方で使われるのは「黒塚」という名前、今度の歌舞伎座の開場記念講演でも「黒塚」は上演されました。この「安達ヶ原」の方は長唄の人気曲として根強いんですけども、これは舞台をやるには難しいところがありまして、演奏会場でしか上演しません。私が書いたのは今のような民話を語り手として置いて、その民話の中で一説も割愛することのない、「安達ヶ原」を前ジテのところから全部上演しました。どこでやったかといいますと、一番最初は淡路島、私の故郷です。「ありがとう、淡路島」というコンサートを開催し上演しました。淡路島に「しばえもん座」という劇場があります、これは「しばえもん」という狸の民話があり、その狸の「しばえもん」という名前をとった文化会館ですがそこで上演しました。この「安達ヶ原」だって普通に演奏してしまえば、一般の方は何にもわからないと思います。私は「安達ヶ原」というのを隅々まで勉強していますから、あの一説をやり始めたんだな、というのはわかります。踊り踊られる方もそうでしょう、隅々まで勉強しているからすぐわかる。普

通「安達ヶ原」を長唄で演奏しようが、踊りを踊ろうが、とにかく隅々まではなかなかわかっていただけない。これを民話と一緒にくっつけたらどうなるだろうと思ひまして。私が書いた台本は「とんとん昔あったけどのう」と坊さん来たところまで同じです。途中の舞踊に変わるところで民話のナレーションをこんなふうに替えてみました。そうすると、小学生、中学生、高校生、今まで古典芸能に全然縁のなかった女の子達が「へえ〜」日本の笛って面白いね、って。日本の太鼓って面白いねって言う事になるのです。それで三味線が始まるわけです。僕が書いた台本はそこに「黒塚」の「第二景」を入れました。その時は「しばえもん座」始まって以来の定員500人の劇場に800人入りました。全部壁も何も真っ黒です。それほど日本人のDNAは自らの文化に飢えている。だけど飢える接点、飢えているものを舞台の上から発信する人との接点のちょっとした工夫でそんなことになってしまう。僕は一回だけありがとう、自分の故郷に対してありがとう、というつもりでの上演だったのに、とうとうこのコンサートは3年続きましたが今は休んでおります。

この「安達ヶ原」に関してはその後も、上野の芸大の非常勤講師をしていた時に、有志の学生を集めて上演しました。学生は結構面白くやってくれました。長唄だけではなくて、「先生、ここピアノ入れたらどうだろう、洋楽と1回コラボレーションでやらせてください」と言われたので「君達の課外授業としてやってみて。あまり俺の趣味じゃないけどね」と。もう一つ面白かったのは洗足音楽大学です。「この台本そのままやってみる」といったら、卒業公演の時にやってくれました。これは作曲家の先生が合唱曲で「第2景」の場面を、能楽の詞章をとって、洋楽の合唱曲を作曲してやりました。これは面白かったですね。クリスマスにやりましたけれども。洗足音楽大学の音楽堂というのは大きなパイプオルガンがありまして、そのパイプオルガンが鳴って、オーケストラやって、語りをやって、それで長唄をやって、これは面白かったです。歴史を調べてみますといろんな私達日本人の持っている芸能というものの、親しみ方の接点があるんだな、とい

うことが発見できたのが非常に僕にとって収穫でありました。

今日は日本舞踊振興財団、西川扇藏先生が理事長で先ほどもちらっとこの会場見ましたけれども、多くのプロの方達が、そしてプロを目指す方達が一所懸命、日本の芸能の伝承の中に身を投じてやっておられる姿を見て、とても嬉しかった。いい風景だなと思っていました。今度皆さんがそうして身に付けられた日本の伝統芸、というよりも伝統文化といってしまおうと簡単ですけども、この伝統文化をさらにポピュラーにしていく作業は大変なことだと思います。特に教えておられる、お師匠さんのような立場におられる方達も、そういうお師匠さんの所で一所懸命修行に励んでおられるアマチュアの方にしても、これはやはり本当に時間と労力と、何よりも経済的にも本当に大変な苦労しながら日本のDNAを自分の中に取り込んでいかなくてはならないですね。そういう意味では芸大にしる洗足音楽大学にしる、これは学校の一つの実習講義の中でできるという利点がありましたからね、私は大変うれしかったです。

そうこうするうちに予定している時間が来ました。最後の締めをここで話したいと思います。私達はより高度な文化文明を次世代へ、次世代へ語りつないでいき、そしてそれを教え伝えていくという大事な義務を負っております。同時にそれが横に広がっていかなくては何にもならない。一本の細い穴の中だけを細い糸を通すようなこれも大変大事なことです。

けれども、やはり横に広がる活動も大事なことです。その手段として私が申し上げたのは、私の場合はこの15年間はそういう難しい伝承的な、現代の感覚では理解がしづらいものには、民話を使ってみました。これが大成功しました。さて皆さんはどのようなものをお使いになって、自分の子供、それから自分の孫へ、自分の思いを自分の喜怒哀楽を自分の歴史を残していかれるのでしょうか。これは自分ひとりひとりの持つ方法論であり角度であろうかと思えます。ずいぶん長い話になってしまいましたけど、本当に暑い中よく聞いて下さいました。ありがとうございました。

山口 崇氏 プロフィール



早稲田大学教育学部英文科中退。
NHK俳優養成所・劇団三十人会・俳優小劇場を経て
1974年小沢昭一氏等と芸能座を結成。
1980年解散。

主な出演作品

《舞台》「女たちの忠臣蔵」「三婆」「坊ちゃん」他多数
《TV》「天下御免」「御宿かわせみ」「大岡越前」「クイズ・タイムショック(司会)」他多数
《映画》「横堀川」「春一番」「命果てる日まで」他多数
他、ラジオ出演、CM出演多数、各地に残る昔話を日本全国取材し、
現地録音した番組「音とたかしと昔話」は約七年間FM東京で放送を続け
ギャラクシー賞を受賞。また、それをもとに数々の著書出版。
特技は長唄三味線で杵屋巴風という名取名を所持している。

松風物の系譜⑤

東京大学文学部 教授
古井戸 秀 夫

清元の「須磨」は、上下二段の大曲です。上の巻には、松風・村雨の姉妹がそろって汐を汲む「二人汐汲」、行平を交えた三人のクドキから総踊り、下の巻には行平に代わって此兵衛が絡む三人のクドキ、松風の狂乱にも此兵衛が絡んで立ち廻りの所作ダテになります。それまでの松風物の華やかなところを全部集めた、欲張った内容の舞踊劇です。

初演は、文化十二年（一八一五）五月、江戸市村座。高富久吉（太閤秀吉）の家臣、飯沼勝五郎が兄の敵滝口上野を討ち取る、『箱根靈験鬩仇討』の大切に増補されました。聚楽の御殿の御遊に、小野のお通、佐渡島お国、伏見山三郎、この三人の役者が招かれて、「今様」の「松風」を舞踊劇にして踊る、という設定でした。佐渡島お国は、「かぶき」の始祖、出雲のお国のことです。『舞曲扇林』では、小野のお通が佐渡島お郡（おくに）に「浄るり」を伝授した、と伝えられています。「かぶき草子」では、名護屋山三郎の亡霊が出雲のお国に「浄るり」を教えた、ということになっていました。書き下ろしのときには、そのような伝説の名人が三人、太閤秀吉の聚楽第に召されて、舞踊劇を踊るという豪華な設定になっていました。

「須磨」の本名題は「須磨の写絵」です。「写し絵」は、オランダ渡りの「トフルランターレン」（悪魔のランタン）と呼ばれる幻灯機「エキマン鏡」（影絵目鏡）を使った見世物のことでした。ビードロに彩色絵具で絵を描くと、その色彩が綺麗に再現されました。それゆえ、「極彩

色の長崎かげ絵」あるいは「彩色影絵阿蘭陀細工」と謳われたものでした。江戸では、亀屋都楽という人が始めました。「切支丹の法」と称して噂になったので奉行所に召し捕られ、奉行の見る前で実演をして許された、と伝えられています。「写し絵」のように、美しい色彩が甦る、というのがこの所作事の売り物だったのです。

伏見山三郎の役で、中納言行平と此兵衛の二役を踊ったのは、大坂下りの舞踊の名手、三代目嵐三五郎でした。江戸の御目見えで踊った「塚本狐」（女夫狐）や「狐忠信」は、実父二代目三五郎譲りの家の芸でした。「八変化」の所作事では、自分で工夫した一本足の傘の化物、後ろ面の夕霧・伊左衛門では花道でくるくると廻って見せたと言います。ケレンの素早い動きが売り物の踊り手でした。「石橋」の「執着獅子」を肥った布袋の姿で踊って見せたのも、江戸の見物には驚きだったでしょう。御家の本役は、二枚目の色事師でしたが、顔が不細工で寸足らずでしたので、そちらで成功することはありませんでした。踊りの名手で、白塗りの貴公子から赤っ面の荒くれ男の替って踊る、この「須磨の写絵」で名を残すことになりました。

三五郎の相手役は、女形の三代目市川団之助でした。このときは、小野のお通の役で松風を踊りました。子供芝居の人気者で、そのまま出世して立女形になった人でした。技量は抜群でしたが悪い病に罹り、鼻が落ちてなくなっていた、とも伝えられています。鼻から息が漏れて、

せりふは聞きにくくとも、「娘道成寺」で大入り大評判を取る、舞踊の名手でした。妻の実家の桐長桐の櫓を復興したものの、上手くゆかず自刃して果てました。「須磨の写絵」から二年後のことでした。この人もこの作品で後世に名を残すことになった人でした。

「須磨」の上の巻の「汐汲み」には、「脛もあらわに、ぞんぶりこ、ぞんぶりこ…こちゃ、こちゃ知っている」という、軽く砕けた文句が使われています。それまでの「汐汲み」にはない、軽快で生き活きとした動きはそこから生まれたものだったのでしょう。「ああ辛気、しんき辛気を汲み分けて…」のところは清元の聞かせどころです。三人の手踊りは、「川千鳥」「友千鳥」「村千鳥」「島千鳥」「小夜千鳥」「磯千鳥」「斯様千鳥」と「千鳥づくし」の歌詞になっています。千鳥が楽しそうに飛び交う、その動きが面白くできています。

下の巻では、此兵衛の出端で三人が踊るところが華やかで、手踊りの続きを見ているような感じがするのではないのでしょうか。松風が気絶したあと村雨をクドク、「なんぼ、そさまが海女の子じゃとて…」で此兵衛が、海に潜って泳ぐ振りなど、面白い振りが付いています。三代目三五郎という人は、このような踊りを踊る人だったのだろうと、その姿を髣髴とさせるところではないのでしょうか。松風の狂乱にも此兵衛が絡んできます。「蝶も菜種に物狂い」で蝶々の振りをしてみたり、悪身で滑稽に踊ったり、立ち廻りの所作ダテまで、息も突かせず踊り抜きます。松風を初演した団之助は、立ち廻りもうまい女形だったのでした。下の巻だけでも、見どころ満載なので、舞踊会などでは上の巻を省略して、下の巻だけを出すことも少なくありません。作詞は二代目桜田次助、作曲は立三味線の清元万吉でした。



当財団では立ち上げ当初より青少年に対する日本舞踊の普及活動を様々な財団の活動の基幹の一つとしてきた。かつて教育現場では西洋音楽、西洋美術のみが音楽、美術という科目で教えられていた。現在は私学のみならず公立総合高校でも、授業でまた課外活動で日本舞踊に接する機会が存在している。しかし中学生以下の児童に対しての日本舞踊に接する機会を設けると言う事に関しては未だ道は遠しという感がある。

その中で財団では主催事業の日本舞踊子ども教室、文化体験プログラムといった、小、中学生児童に対する普及活動を行っている。本年度は文化体験プログラムが8月5日(月)、6日(火)、7日(水)の三日間行い、日本舞踊子ども教室は10月～1月まで月2回(計8回)行っている(会報発行時に終了している)。文化体験プログラムは当財団所在地である新宿区が夏休みの児童達に対して新宿区内の施設で(日本舞踊は四谷地域センター多目的ホール、その他は西新宿にある芸能花伝舎)本格的な伝統文化、芸術文化体験、経験をさせようという企画である。そこには雅楽、三味線の様な伝統文化からマジック、ウクレレといった大衆芸能まで様々なジャンルがあり、それぞれそのジャンルの先生方が児童達に基礎の部分进行を教える。ここ2、3年50人を超える児童が参加しているが、今年も60人近くの児童が参加した。財団では児童達を小学2年生までの小さい児童のクラスと小学3年以上の大きい児童のクラスで分けをしているが、参加児童数は圧倒的に小学2年生までが多い(幼稚園児、未就学児童も含む上、高学年児童はどうしても他の習い事等との都合上中々出席しづらいようである)。4乃至5対1位の割合で

あろうか。所謂日本舞踊のお稽古は基本的には個人稽古になるが、この教室では団体稽古と言う事もあり小さい児童のクラスでは始まる前はざわついていて、会場内を走る児童、大声で話をしている児童等、教室が開始できるのであろうかと不安を覚える状況であったが、講師達が「始めます。並んでください。」と一声かけると静かに整列を始めその後は非常に熱心に浴衣を着ての座り方に始まり、挨拶の仕方、扇子の扱い方、最終的には実際に踊りを踊る所まで学んでいた。大きい児童のクラスは逆に始まる前から静かに開始まで先生から声がかかるのを待つ状態でありその後もスムーズにクラスが進行して行ったが、何年かでも年長であると言う事だろう、講師も言っていたが進度もこちらが想像していたよりも先に進んでいた。流石年長組といった所か。二日目もまた同じような形で進行していった。三日目は小さい児童のクラスの終盤に事業の主催者である新宿区の中山弘子区長がお越しになり、児童達の三日間の成果をご覧になられた。区長に挨拶の中で新宿区を文化の発信地としたい、その為にも来年以降もこの事業を継続するとの力強いお言葉を頂戴した。毎回最終日(三日目)には当財団理事長も成果を見に四谷地域センターまで行き、感想を述べ挨拶をしているが、今年は小さな児童のクラス、大きな児童のクラス両方でクラス終了後に児童達、その父兄達が記念に理事長と共に写真を取りたいとリクエストしてきたので快諾した。記念撮影を取っている時の児童達の表情が非常に充実した時間を送ったと感じている様な表情であり、日本舞踊が夏休みの一つの思い出のみにとどまらず継続して興味を持ち続けて貰えるのではないかと思えた。

10月に入り当財団主催の日本舞踊こども教室が始まった。こちらは月に2回(土曜、日曜、祭日の中から選ぶ)、場所は文化体験プログラムと同じく四谷市域センター多目的ホールにて文化体験プログラムと同じく団体稽古にて日本舞踊を学んでもらうという文化体験プログラムより長いスパンでの事業であり、より実際の習い事としての日本舞踊のお稽古に近い形での事業となる。この事業では9月の小、中学校の授業開始直後に案内のチラシを学校で配って貰い、参加者を募る。今年もその様に行ったが結果上記の文化体験プログラムを経験した児童の参加が多かった。こちらのクラスを見ていると文化体験プログラムを経験している子達はよりスムーズに講師達の言葉が入ってくるようである。この事業のチラシを配布すると様々な質問が父兄から寄せられる。その中で一番多いのが学校の行事と重なっていて参加できない日がある、他の習い事があるので参加出来ない回があると云ったスケジュールについての質問である。学習塾、ピアノ、水泳といった他の習い事があり参加出来ない回があるが進度についていけるか?という事である。講

師達はベテランであり上手く指導を行い進度にバラつきが出ないようにしているという旨を伝えると多くの父兄は納得し事業に参加をするが、一部の父兄からはやはり欠席が多くなるので参加は見送るという連絡がある。非常に残念な事である。学習塾はともあれ、他の習い事の為にこちらの事業には参加が難しいと父兄に言われると、日本舞踊の置かれている現状を垣間見ている気がしてならない。我々にとっても今後の宿題となる参加児童の父兄からの質問、意見である。

上にも記したが、現在日本舞踊が置かれている状況は厳しいものがある。子供達は数多ある音楽、ダンス、ファッションの中から自分の好みを取捨選択するのである。その中で日本舞踊が如何にして選択されるようにするのか試行錯誤しているというのが現状であり今回取り上げた文化体験プログラム、日本舞踊こども教室はその活動の一部である。

当財団では他にも青少年に対する日本舞踊の普及活動を行っているが、それらについては次号以降に記したいと思う。



特別会員 ご芳名

日本舞踊振興財団では、特別賛助会員制度を設け、下記の方々にご支援を
 いただいております。是非ご参加をお願い申し上げます。

◎会費 1口 10万円(1年間)
 ◎特典 会報のご送付
 会報・公演プログラム等にご芳名掲載
 財団主催イベントにご招待

飯 田 侃	竹 内 小 道 具 (演劇舞踊小道具店)
飯 田 君 子	東 京 信 用 金 庫 (理事長 半澤進)
飯 田 信 子 (飯田不動産 代表)	東 信 企 業 (株) (代表取締役 金澤克夫)
飯 田 全 子 (和光不動産(株) 代表取締役)	西 川 井 扇
市田(株)井筒工芸ディビジョン	(株) 西 菱
(有) かつら大阪屋 (代表取締役 長坂誠一郎)	NPO 法人日本伝統芸能振興会 (会長 石田寛人)
金井大道具株式会社 (代表取締役 金井勇一郎)	NPO 法人日本文化研究所 (理事長 木村知躬)
歌 舞 伎 座 舞 台 (株)	(株)ビデオフォトサイトウ (代表取締役 斉藤政雄)
(有)ギャラリー竹柳堂 (代表取締役 藤澤繁)	報 知 新 聞 社 (代表取締役 早川正)
向 陽 開 発 (株) (代表取締役 鈴木甫沙子)	(株)ホテルオークラ東京 (代表取締役社長支配人 清原當博)
松 竹 衣 裳 (株) (代表取締役 酒井誠一)	菱 本 俊 一 (株)古美術数本 代表取締役)
セガサミーホールディングス(株) (代表取締役会長兼社長 里見治)	山 本 化 学 工 業 (株) (代表取締役 山本富造)
関 根 愛 子	(株) 吉 岡 衣 裳 (代表取締役 清水喜重郎)
大 東 建 設 (株) (代表取締役 齋藤満宣)	
(株) 瀧 川 峰 晴 堂 (代表取締役 瀧川明行)	

◆財団の趣旨にご賛同いただける方は財団事務局までご連絡ください。特別会員について
 ご説明いたします。その上でご希望の方には申し込み書類をお送りさせていただきます。

財団事務局 TEL 03-3354-5496

NBF活動報告

- ◆ 第47回講演会
日時：平成25年8月2日(金)
会場：東京信用金庫本店8階ホール
演題：「民話と古典芸能」
講師：山口 崇
- ◆ 新宿区「こども文化体験プログラム」-日本舞踊-
日時：平成25年8月5日(月)～7日(水)
会場：新宿区四谷地域センター多目的ホール
内容：新宿区主催の子供達の体験教室
- ◆ 新宿区日本舞踊こども教室
期間：平成25年10月14日(月、祝)～
平成26年1月13日(月、祝)
会場：新宿区四谷地域センター多目的ホール
内容：文化体験プログラムを更に発展させ、
日本舞踊の基本を曲にあわせて踊る、
最終回は発表会を行う。

NBF行事予定

- ◆ 第48回講演会
日時：平成26年1月27日(月)
会場：東京信用金庫本店8階ホール
演題：「絵手紙と「こころ」文化」
講師：島田 幸吉
- ◆ 幼稚園おどり教室
日時：平成26年2月17日(月)
会場：東洋英和幼稚園
- ◆ 次代の文化を創造する新進芸術家による
日本舞踊公演
日時、会場：未定



公益財団法人日本舞踊振興財団 「NBF」 No.45

発行 公益財団法人日本舞踊振興財団
〒162-0065 東京都新宿区住吉町
10-8 片桐ビル 301

印刷 株式会社デイエムピー

発行日 平成26年1月

編集後記

今年も国内外を問わず日本舞踊の普及・発展に
臨む所存でございます。また平成26年度は今
年度行わなかった大型海外公演に挑む予定と
なっております。この冬は世界各地で寒波によ
る被害が出ているとの事、皆様にはお体ご自愛
の上お過ごし下さい。